

水井憲推*・菊沢喜八郎**

日本の国の花であるサクラは日本列島における花ごよみの代表として、多くの人に親しまれている。日本の山野に自生する種は6種とされているが、選抜や改良された園芸品種は300種以上にもなる。北海道に広く分布するのはエゾヤマザクラであり、街路や公園、庭園樹などとして植栽され、また、いくつかの地区に巨樹・名木がみつげられている。

エゾヤマザクラの花には1本の雌しべがあり、それを取り囲むように数10本の雄しべのある両性花で(図-1)、北海道中央部における開花は5月上旬である。1本の本において、花芽が膨らみ始めてから雌しべが落下するまでの各段階の花の構成割合を調べてみると、年によってわずかに差があるが、花弁が展開している期間は3~5日間である(図-2)。

花には蜜と花粉があることから開花中にはいろいろな昆虫が訪れる。美唄市の実験林の木(山地)と試験場構内の本(平地)とで花粉を運搬するとみられる昆虫を調べてみると、平地の木にはミツバチが頻繁に訪れ、山地とはやや異なっていた(図-3)。ミツバチは樹冠の外側の花に飛来し、数花を訪れて飛立つような行動がみられる。しかし、トラマルハナバチは最初に樹冠の外側の花に飛来すると、その後は次々と多くの花を訪れ、樹冠の中の方の花にまで移動するような行動がみられた(図-4)。

エゾヤマザクラは花がたくさん咲いても果実が発達するものは少なく(図-5)、6月上旬に未熟で落ちてしまう。樹冠の外側では成熟する果実が多いことがいよしば観察されるが、このことは花粉を運ぶ昆虫の行動と関係しているようである。雌しべに他家花粉をつけてやると成熟する果実が増えた。しかしながら、花粉をつけても全部が成熟果実になるわけではない。良い花粉が十分に運ばれていないこと以外にも原因があるらしい。

受粉に成功した花は子房が膨らみ、果実が発達する(図-6)。花が終わってから50日くらい経つと大きくなった果実は赤くなり、やがて黒くなる。この頃が成熟期で、木々に時が訪れ果実をついばむ光景がみられる。樹の下には黒熟した果実が落ちているのに混じって鳥に果肉を食べられたタネ(核果)も落ちている。比較的大きい果実なため、風によって遠くに飛ぶことはできない。鳥に運ばれるタネが親木から離れた場所で発芽をうかがう。そのためか、鳥に食べられてもタネは壊れず、また、土の中で長く生存することも可能である。私達は、エゾヤマザクラのタネが土の中で5年間くらい生存していることを確かめた(図-7)。したがって、土の中に埋まったタネは何らかのきっかけで発芽(図-8)するのであろう。それらは、やがて大きな木に成長し、私達に花を楽しませてくれたり、香水として、また工芸品の材料などとして用いられる。

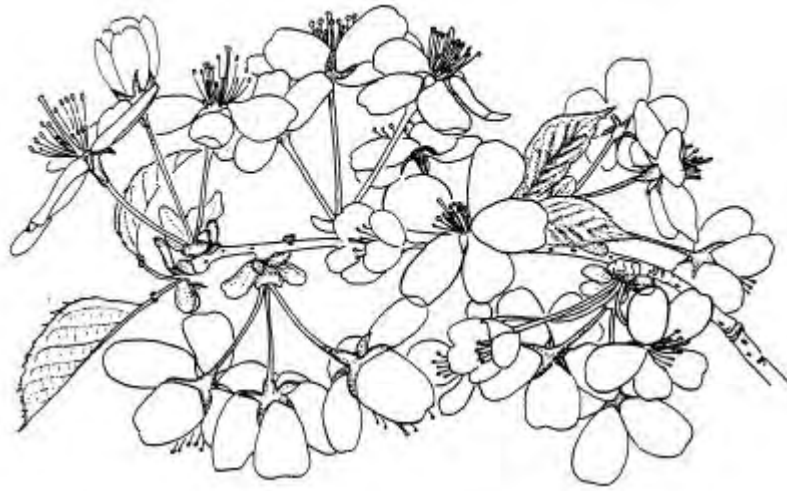


図 - 1 エゾヤマザクラの花
雌しべと雄しべのある両性花

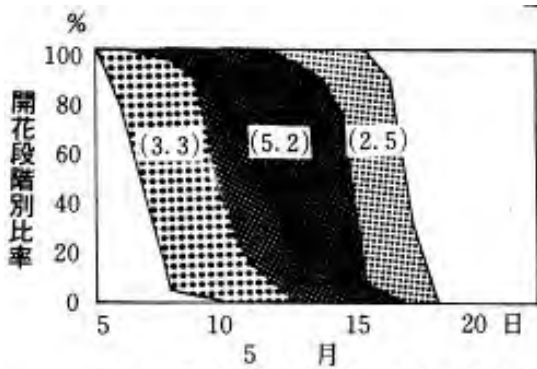


図-2 花の発達段階からみた開花期間

■■■ 花弁が伸び、ガク片が割れた花
 ■■■ 花弁が展開している花
 ■■■ 花弁は落ち、雄しべが残っている花
 図中の数値は日数を示す。

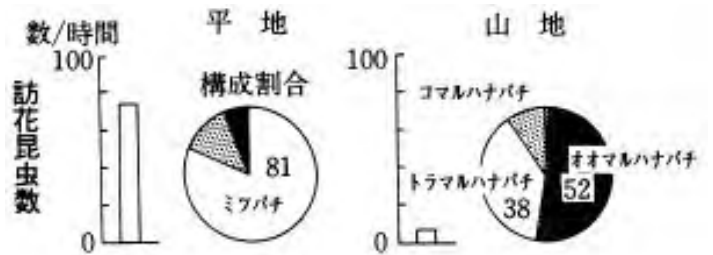


図-3 平地と山地における訪花昆虫の違い

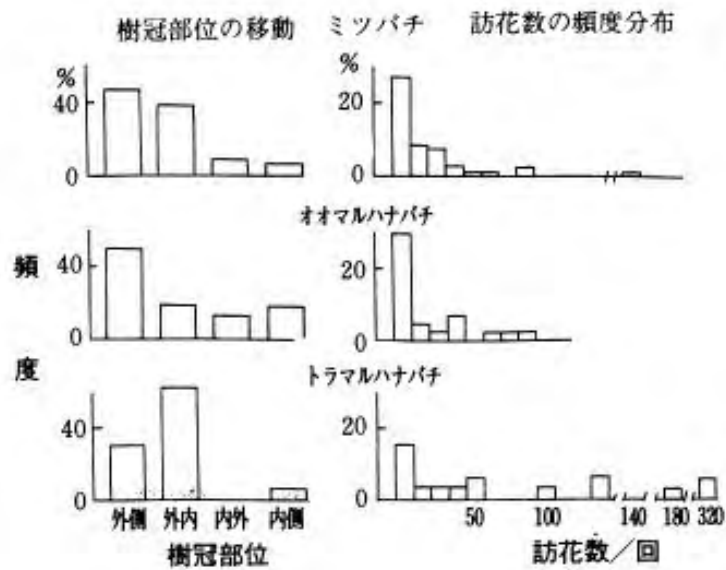


図 - 4 訪花昆虫が飛来した樹冠部位とその後の移動
および1回当たりの訪花数

